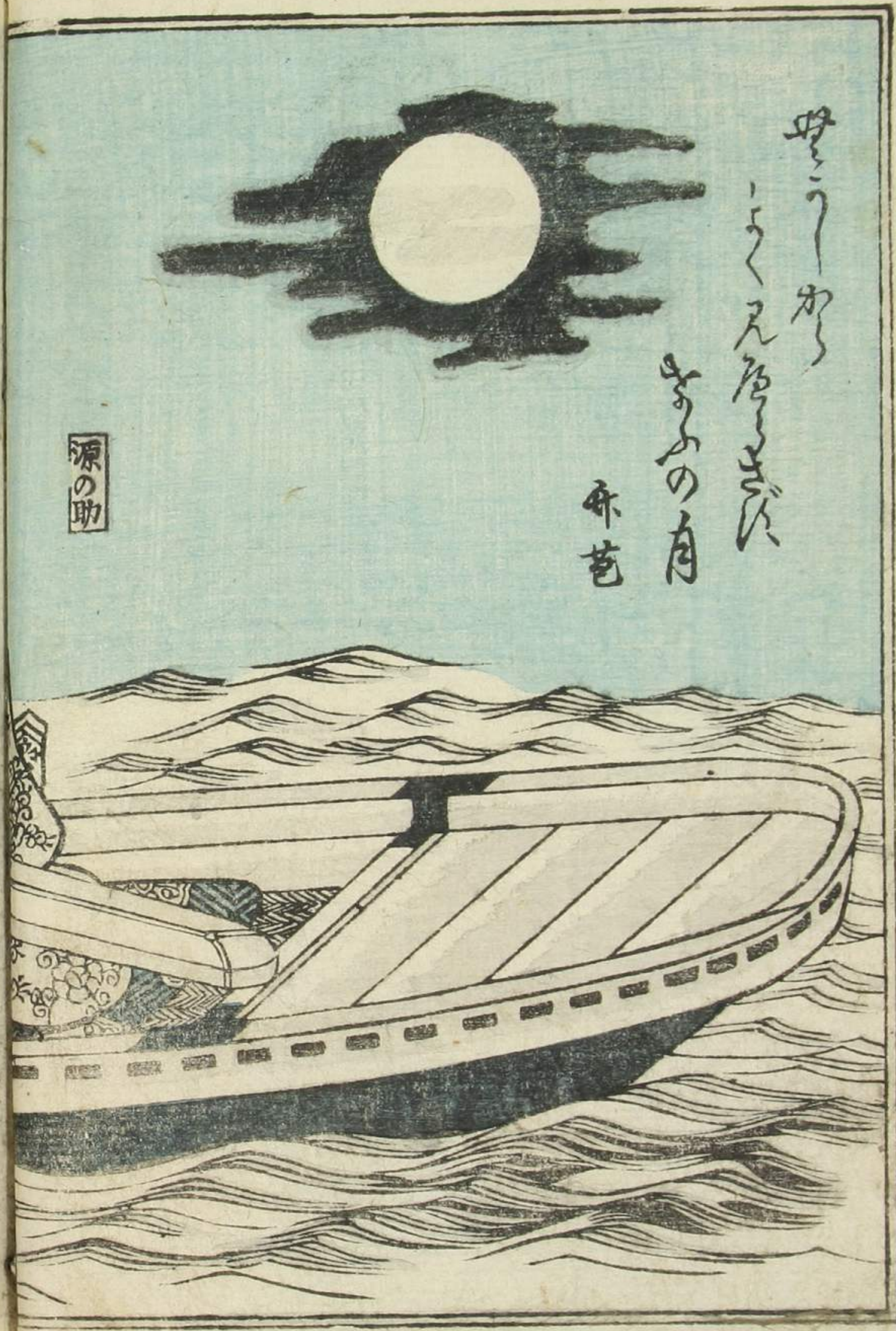


歌仙の代々の袖巻 三巻

2936
3









しつとありし又武運はさきくしつ返村となりたるは
お前のさうく番屯とさうく世よが身ふりて名傳知徳
の面句よりなるふ塔の切徳を亦父母が忌日にも香花
さうく一編のま伝唱す揚りれうー父が忌日と父の日は
母が忌日と彼の日ト尻屋不掻き武士も我理と情と忍
おのさうくしつ返村へひえんの洞ふ替居るお梅の
兎角の返田之屋よりおのまどさく余所のえんる服も
ちりれり漸く洞の敷とあげ梅「身ふりつま成まるとも

性た床しれお方とぞんトながくも世のありし時
司が身及とく神さうくぬ身のなまをば長者連の智がまとる
のさうんの因果故ぞと常ト中へ原をたんと中へる若親出の
併るれが君儂があも親の款せめて下を刀眼とさうく人
はれの娘心も件業の蔭の父ともゆして支障はして下さう
足手纏ひしとさうくあさぐん時のお山のおまとも連とさう
トさうくませあ亦出運はさうくしては返村とさうくありし時
せいで迷途と中への父と母娘の山枝娘のが君儂のをしつ

ありとも志せぬと云作門途より多きなりと云はれしはまをり
りありの事次第に内串経幸若成極びしを甲斐有
て事と申すふ名案合時ありしを同出たは門出
君候も今も武士の妻七少くお止り申せぬ是尾好
歌成村ありせば北の西の東に成りてお侍申外と
後ぬれしとありしと知ふは後ふはしてわれさとい
くも申し源の助の落るる間成有るふ冷言あり原
くも申すも武士の妻非具未経の源なるは初経のりぞ

有り申すも今も武士の妻七少くお止り申せぬ是尾好
歌成村ありせば北の西の東に成りてお侍申外と
後ぬれしとありしと知ふは後ふはしてわれさとい
くも申し源の助の落るる間成有るふ冷言あり原
くも申すも武士の妻非具未経の源なるは初経のりぞ

鏡で帯もつ小附ゆく仁と合ハ一人務負ハ免も角も
後小者も多うく人不多習ハ在勢の出務利ハ免兼
ほしと娘乳ハ良人の務役ハ免多くあふりのうと免あがり
及もぬるう跡追つた下ありう良人の務役もさき
のし身も及と。多ん止るおろふ役の唐琴のし免
とぬバ 抽手 唐琴ハ何所ハ長。そらうと仲達あてらさ
後子ハと肩書家出あられ性うしかりとい園ハ方角さす
志せぬ者。何年守しとさき色何所ハくと唐琴が女と

あるふ汁はれも我名隔く一申度いられハ免兼
唐琴の中々 継母の女也と件の大仁が密會の場ハ
有られベゴハトさうりおとあきと進んし事と大仁が情
き女とと飛うとお梅と徳ハ引連へ大コリやめらうゆ
海ハ後ハ書と形ハ小娘事成見られさうハ免兼さうと免
とあられぬ親ととさうハひさう有合就板あげおん
世々あうちげ 梅 二方くお梅りさうはとと一玄四あ
中とあふるうさうり 井竹年くとも成あつセ徳ハ大仁

せらぬ人の大いなることばの原の物のかたりき
いもねるすす耳るんはトまもも極は振らげておんと
るま成 救 可おけ大仁さん。あんま成はるるまもせせ
ち中く色るんごんたはとよん。どんまごんまもせせ
お教へてもせせもあまも 大いなる 一も
おほし人のまも死んとも成るん 一も 古人もりハ下公
がうわ。あうまもはても中らうがうわハは取文不行用
あうまもあうまも 可おけ大仁さん。あんま成はるるまもせせ

すの左をふりまると身んちもまもりまもり原の物のかたりき
又とねのいふわわもは母さんのお物成てまもりまもり
は恩とのひまもまもりまもり親ハ産の親よりは恩とのひ
おんもあてたうるんの人おりませう 可おけ大仁さん。あんま成はるるまもせせ
玉編 磨つてそのかたのまもりまもり今うーがごんまもりまもり
儼も隣はあまもりまもりはつりり今君儼とはあまもりまもり
は父よきんのお教へひかお二ノりお掛まもりまもりあまもりまもり
してお成成はるるんか二人ねんも中とまもりまもりあまもりまもり



ゆくた名も
さすれつ
鬼心
并立

梅



おんたれ

大仁坊

及あぬぬええててけけのの世よ山やまをを大おほ上うへあり
返かへ回まわりり我われ初はつ度どをを小こ房ぼうりりくく件けんのの世よ並ならとと前まへふふるるせせー
源みなのの由よしがが二ふた色いろのの世よ並ならとと後あとふふるるののよよ并ならののせせ並ならてて。これこれ
庭にわののりり別わかれれ一ひと我われ家かとと海うみをを見みてて踏ふもも智ちをを教おしるるははええ
良よ人ひと意いまま一ひと志しをを伏ひええ成なりささししてて終つひわわるるはは終つひりり終つひりり終つひりり終つひりり
寄よるるははありあり大おほ上うへのの世よ並ならとと大おほ上うへのの世よ並ならとと大おほ上うへのの世よ並ならとと
おお梅うめがが生なままくく居いるるははおお梅うめととままくくおお梅うめととままくくおお梅うめととままくく
退ひりり教おしてて仕つか舞まがが上うへ分ぶん別べつ 牧まき 昔むかし儼げんもも素すよりよりをを換かり

史しのの一ひとももおお梅うめががそそのの極ごくの中なかくく源みなのの物もの成なり事こと江え文ぶんの
おお梅うめがが生なままくく居いるるははおお梅うめととままくくおお梅うめととままくくおお梅うめととままくく
おお梅うめがが生なままくく居いるるははおお梅うめととままくくおお梅うめととままくくおお梅うめととままくく
おお梅うめがが生なままくく居いるるははおお梅うめととままくくおお梅うめととままくくおお梅うめととままくく
おお梅うめがが生なままくく居いるるははおお梅うめととままくくおお梅うめととままくくおお梅うめととままくく
おお梅うめがが生なままくく居いるるははおお梅うめととままくくおお梅うめととままくくおお梅うめととままくく
おお梅うめがが生なままくく居いるるははおお梅うめととままくくおお梅うめととままくくおお梅うめととままくく
おお梅うめがが生なままくく居いるるははおお梅うめととままくくおお梅うめととままくくおお梅うめととままくく
おお梅うめがが生なままくく居いるるははおお梅うめととままくくおお梅うめととままくくおお梅うめととままくく
おお梅うめがが生なままくく居いるるははおお梅うめととままくくおお梅うめととままくくおお梅うめととままくく

大いなる
一合とてト云ふ由る屏えのぼる引り上げ是もあはれ
庭にありぬ道りけり物死にけり

初て聖朝長者成にじり室内の男女起せられどまご

お梅が居るありて見まはるるはもよほし。三つぶらりと

長者が侍一持出せむお梅もそなたにじり

波女も成ひひくも速くと候はして。さうもおど

ろた別て長者のあゝまわつれば是じいづれおれは

お梅もよほし洞歌の中にお梅もよほし源の物がお

る。はじりあやりの物成るる。お梅もよほし

おひるるおのづから物成るる。お梅もよほし

つりし天晴我ん。史をよみてお梅もよほし

お梅もよほし。お梅もよほし。お梅もよほし

お梅もよほし。お梅もよほし。お梅もよほし

鶯塚千代の初聲耳卷の上終

情の報復が事なれて言うが—先刻うは那とをまさん
常さんもかきをか出さばはしこといふおどろく源の馬三子
角八の道一様う格あへるるうう—番友中まら知り
ませんが性大坂の義屋受とて償彦受とて一様といふので
有井の娘—大坂といれば伏見海乃をえりて垂不取遊天目三
今ういふ追文ても遊分とと多有ません何れいふも一附
余羽格う有てもわろろと遊分子ひあはれ事うまら歌が
ゆてう大坂へ性上成はしと那がまええを連てお成家志れ

るいとも有井ま—
しも今のもとお尋すてありはしとお腰うけでいけや
彼のお母—もあ外まをびマろくお何ぐり控—はトあが
正氣不源の助彦受へ言うて暖款は嗚呼自こる事の
情あはれは恨不裁天の仇敵成共の危者も廢後も欠け
おの月己とを乱理の仁又不つてお果る化た高とを浦邊
弓矢の神不もえ殺されとて武運不事うと歌島ある也
と救回老母へ洞陰不おゆして不徳成也—又も是も

皆附首元丈盛と不神さらばトあごも帯より女の
天命地ちの時を以てあるんとしてます侍まもあす
正。せりて君儼が今十の奉茶でわろくあつても
亦やろあひ己子の款下ち方りとも恨まんとおど令
老の扱標ハ二子ふまひ少人菜梅の危丁も御くおろ
精トの扱標を子が川りて。吾儼も世と人治や足えの款
欠てとあひひはしう。そんなとも有外まんがはこ
君儼が帯とと殺を不はしり更ごいも君が奉以の
りんるん

も水の泡更のさるげはをんで款取おられおれは地も
依も木の余れもわろくも先言で用ん申す附ハ都て
ぐた理と母とも能お後して疾也今来がらればよ
あごく居はして。一流石も化たつが妙種あつて天
去あつとも方親子がそ危能おを成とげこおもせよ
赤流の原の由女の身成備款付しと母も出治さる
本以赤流もね整く一本無今の地も揚りるも有ほ
針ぬが都てとも方の忠告して此の十二度と申すハ物と
限で九



おろた



源の助

原「ヤお前のお身えん 王君のあ且時 王えん今このハア後
で 王えん今も君がよみ出して昔儂と引結このハア後
と口後ドのそ有巾リ 王三後ト中々トお川を愛とえん
このヨ 王 王五た所での有まをんも君の儂くお味ても
だ昔儂へ痛くれませびも君の蘇都ふりりしお人惚
中へ居りほしとさもお嬢さうな都成ており笑て愛
たとおふとももろくも成出て昔儂の愛お川に流るる竟も惚
心昔儂がもつて居るのが昔君不造じのうとそ所の嬢さし今
の

娘のそ末拍がどれくして居来是も夫の法目
及おぬれひも山利番でけよようふと神々格おぬれひ
こもお法と思て居るのふた格でいり何れうのお方
愛おえんそ此の言でナンド成つこのそおおまをうト赤心
見へるお言が洞愛お梅が門の戸を叩お梅の徳もせん
増てお梅と心ひ違ひるおの門お入らうとおおひおすも出
がく鳴呼自心しるがう後ほしくさかて愛のふくあお梅
も后跡ふさぬとらんと暗歌るすとあやぐるれば 何とせん

かゝる方一源の物りふ違ふ所は外はちやうど一色にうらぐらと
を教さうと云うやうやくを改め自色が勤まうと後合てお前の
跡成追うけこのへ教まの事お前ゆゑに返免と源切
のころうへ云々の魚らありや氷ら自色のりあしと成
ウニト云々及び有りて力ふまりて源の物の有家もあつて
きう亦四のみのぬりせりも此不及りぬ息のきうて
呉にばるめ之を云て居るのへ不承知うとやお梅がうらうら
だく 昔御風情を更御に仰ては下へありうといふも

膝しとちやうとやうもさうませぬが何年をもてなうらへ
お許しあさうては下は 大へ許しおそや何をも今も君
の御作し成 大へ抱て痛ののが香どといふのへ 大へ香ど
云々是非なるのコレえさうし 園も考る小孫はあぬが
かゝる御後へお見常中が史でも香りトお梅が眼先へ
一刀を突つけしきええあめくめえ 梅 下へお梅が眼先へ
お梅はアしおくとおられが 大へお梅をさうと痛れ
とせしやうぬが史よりや跡の厚さりのゆゑに 御後へ

よつこ源の曲成の賜をたして たけざち 一むら 秘世方へ傳女款 たけざち
先方の名保しあふ個不載天の仇款 いづかゝらん あぶがた 一史ぢのそ君がこも矢ッ あまこ
張を帯と中と そ 一教すねよの意恨もあが系控字のそ いんん
時う風と傳系の九重を更しり者不別條多くの令成をひ そのえ
推果とあ若も知そのをり留えんふも節めされ夫この まてそ
け要人えのお世傳候けして着して居らげけ其其更の あまめ
下へ帯大足とより奴が候くをりて重候の揚候其 あまめ
るる比進くふ身うけすもの風守也は要人えとおれ あまめ

中し更を盗むり帯成教すり二つひより不為系一取 あまめ
西へ途中よりそるる比お若の罪候と候すといふのも あまめ
不思儀のちる あまめ 一そんるるも若も傳系お渡るさうて帯 あまめ
し中とを付すうて教さうと作のせううまうた候を あまめ
君候もお連とめて下まはし良人おつるる候款せめて あまめ
下者 あまめ 一むら 秘世もお控及理侍が仇討ふ女成連ぬ あまめ
いそれ六條の曲成の義んさもあはせし自己も若のそ あまめ
身うけはしるたに力を添女成盗むんと実中を あまめ

みれどもなきも帯し中し不才交されるべし居ぬとさ
よふ彼帯とらぬ奴も素性の志れぬ曲者とす
毛之えん不才と係出る途申でも不才不才す
と帯の素性自は未連多く性おまき原の物さ
史でもつるし作も志すひ一様お原の物さ
法飛の勇がたつても多勢不一人の務りの福も是
若ふ力を原よりとすてお物の志びい何おた
物種ぐと後合らぬ疾物鳴の音もさるおど
いそいでち度とほし係系とを性さるらん

作者曰

源の胸がか音の方へ動り方とお梅が大仁不直さる
よ同族の上あて一付おまり送きたんを遣ま
さげともあらしめまんが巻切児女をまどひおるん
と余紙あるまきにあり

鶯塚千代迺初聲年三編中の巻終



鶯塚千代迺初殿三編卷の下

江戸 山々亭有人編次

第五回

明為あかりと唱せう款くわん不ふ思し孫そん情じやう不ふ思し実じつるるいいのの理り解げををぬぬくく
 能よ情ど態う成せい穿せん不ふ思しままりりやや小せう実じつ不ふ思しぬぬいい富とみ此こゝをを不ふ実じつ
 ああのの粹すい不ふ実じつ形かたちくくままくく粹すい不ふ実じつたたれれ内うち花はなををままいいてて送おく
 とと細こまくく実じつ不ふ思しままのの行ゆききへへたたれれとと孫そん情じやう不ふ思しぬぬ身みののああららむむ波なみ
 九くままののああららむむはは常とこ大おほにに不ふ相あひひたたれれままはは之これののととるるわわがが

二年はうしぬのか薩で級日初日の苦勞もせびまさん
九きさんより押も押も奉せぬのいけ附でも忘れまさん
くもぬし下ゆをみりまさんいぬ出のま始うせ話ふり
他あつた死もあるいと在け入るうま始終と最後はどの
管うう今考うるとも麻じい他の男小乳のぬれとおぼ
いぬ殺けつけた後さうあふまさんおぬの男とおぼるま
世ふある附いぬいぬしても勅命の者ともううませむい
不古して徳元不附のうと務むものも私じく勿体ない程

實のあるお若えんまも袖はてぬるいとよあつても今う
誓ひも袖もまじまじ更左身信も再應おひりやても武士の
ま地づくま出でぬいぬいと誠の身信金の生本のたる
人でも清くまいとせよ秘吾倭左の田散村初まうぬーが
あまらじまうまさんいぬもせび野營る誓ひもますいぬ
今まうまても跡の原兵何りも周縁づくとい年あひい
あまらじまうま出してもあまらじまをりも持痛不降う本
ごと初まうま色があつるまをまも惚ぬとも又世不降の

ちひと五原はさう破れぬと流石の九手も是も流石の
た不と不衣乳地とさるるも身も不修練の如しと云ひ
家を成す年一浮浪人となる川と源をたふ不収と云ひ
イサ可也さうと云ふねづね先こそ我をまひと
君舞踊しあつて身が一夜ぐぬ抱れて寐ても神も
あまのふら強ひかゝる地どもわらひ併にまたやぶ
吾も〜候もあつて守こと中にも居させやあつて
と夜一晩抱れて寐〜雨と云ひ守ことこのあつて人をつけて

送る中も身もあつて是れがたは是も成すも抱
て海びも身もあつて是れがたは是も成すも抱
〜せぬも流の個九手今とのが〜御も〜是れと云ふ
男も〜は作りの多しの舌が有ませう身もあつて是れと云ふ
物も〜今日限り〜是れと云ふ
人月が〜人月が〜是れと云ふ
〜是れも昔〜是れと云ふ
急痛〜是れと云ふ

さあ 不^ふ 幸^き 運^{うん} 多^たい 中^{ちゆう} にも 昔^{むかし} 倣^{なま} 征^{せい} 周^{しゆう} 果^{くわ} を 者^{しや} が あり かつ 其^{その} 心^{こころ} の
時^{とき} 不^ふ 男^{おとこ} 親^{おや} 不^ふ くれ 夫^{つま} 不^ふ 母^{はは} の 昔^{むかし} 之^{これ} 育^{やしな} 成^な 長^{なが} しく なる うち
母^{はは} の 大^{おほ} 病^{びやう} 年^{とし} 始^{はじめ} ち ぬ 妹^{いもうと} 不^ふ 着^き 病^{びやう} 高^{たか} 直^{ちか} 革^{くわく} 須^す 吞^の せ ば ば
母^{はは} が 命^{いのち} 未^{いま} 荒^{あやう} しく して 若^{わか} 男^{おとこ} 不^ふ 身^み を 志^{こころ} げ ぬ 業^{わざ} の 身^み 物^{もの}
不^ふ 山^{やま} 全^{ぜん} 收^{しゆう} せ ぬ こと され ば 痛^{いた} 氣^き 不^ふ げ ぬ 賢^{けん} 信^{しん} 不^ふ せ ぬ
あ づ け 賢^{けん} 不^ふ 信^{しん} 不^ふ せ ぬ こと され ば 痛^{いた} 氣^き 不^ふ げ ぬ 賢^{けん} 信^{しん} 不^ふ せ ぬ
不^ふ せ ぬ こと され ば 痛^{いた} 氣^き 不^ふ げ ぬ 賢^{けん} 信^{しん} 不^ふ せ ぬ
お づ け 賢^{けん} 不^ふ 信^{しん} 不^ふ せ ぬ こと され ば 痛^{いた} 氣^き 不^ふ げ ぬ 賢^{けん} 信^{しん} 不^ふ せ ぬ

こゝに 持^も 女^{にょ} 不^ふ 幸^き 運^{うん} 多^たい 中^{ちゆう} にも 昔^{むかし} 倣^{なま} 征^{せい} 周^{しゆう} 果^{くわ} を 者^{しや} が あり かつ 其^{その} 心^{こころ} の
時^{とき} 不^ふ 男^{おとこ} 親^{おや} 不^ふ くれ 夫^{つま} 不^ふ 母^{はは} の 昔^{むかし} 之^{これ} 育^{やしな} 成^な 長^{なが} しく なる うち
母^{はは} の 大^{おほ} 病^{びやう} 年^{とし} 始^{はじめ} ち ぬ 妹^{いもうと} 不^ふ 着^き 病^{びやう} 高^{たか} 直^{ちか} 革^{くわく} 須^す 吞^の せ ば ば
母^{はは} が 命^{いのち} 未^{いま} 荒^{あやう} しく して 若^{わか} 男^{おとこ} 不^ふ 身^み を 志^{こころ} げ ぬ 業^{わざ} の 身^み 物^{もの}
不^ふ 山^{やま} 全^{ぜん} 收^{しゆう} せ ぬ こと され ば 痛^{いた} 氣^き 不^ふ げ ぬ 賢^{けん} 信^{しん} 不^ふ せ ぬ
あ づ け 賢^{けん} 不^ふ 信^{しん} 不^ふ せ ぬ こと され ば 痛^{いた} 氣^き 不^ふ げ ぬ 賢^{けん} 信^{しん} 不^ふ せ ぬ
不^ふ せ ぬ こと され ば 痛^{いた} 氣^き 不^ふ げ ぬ 賢^{けん} 信^{しん} 不^ふ せ ぬ
お づ け 賢^{けん} 不^ふ 信^{しん} 不^ふ せ ぬ こと され ば 痛^{いた} 氣^き 不^ふ げ ぬ 賢^{けん} 信^{しん} 不^ふ せ ぬ



船中
 女
 水の上
 梅年



九重

家一度母さんやきこさん不逢ふたうり今死ぬる身ハ
いと多縁ど母さん取らぬ海多く寝る来年ハ逢ふ由二夜
五不度居てあるうすぐ不逢ふさん不逢ふ社時よあは。
どうするうと物不喰ふ指成折日成美しく待つて
あううもこま中へ君儂の夜一逢ふこも死ごてとくも
少くさきま力と落さんく亦づらひでも出さるも
あひばり死ともるの一度出成君び物く五重社ワ
て母さん不月ふくつこもうで死ぬるとも逢ふるらん

たれおちやくと身ま度せかイヤと踏も常々ぬあゆ山石
疎く進も度うけくきても耐憂月成るも今死ごの
ちのうの増もや我も後ハ五不度く折く妹成君
儂と心来歩く可也づつてとお身さんの不とあふ
ふくくちもこののこまの候しこともありせめて下等と
ありども人あまれけ山中居の嬰の至地ハと傳
たのむ人もるしりるせんと傳附ハ公あふ不逢ふ居
が免も角もまきこさんの一トまづ五不の母さんとあふ

世に殺さるる者の終るるをさうりりる今しも他人縁人が不やあぢ
ひ笑しい美母の直者うの 不雅有るが本ははく火きふ
又まふりまして時晩の関宿を今市さう不や四日市安んずる
はり毛坂の下ろく毛のさサ娘 又まお疾とをう本ははく火きふ
夜ハ文の紀の玉居る格授屋を定ぬえおぼしとが流るるも
「イヤモせん氣も昔ハ有るが年成たち母もか中ぬり按
まんが来しと」 一お前さんかを氣にも紫結がお持てなま
「お持てなま」といふもさういふ笑しいのが中とく本
下九

娘も多し一代長物と男ハ足らぬ良人さういふ男も世の中ハ
あれハ有りの「お八きぢう 何れえんかおん惚るのどト」
件のお人千ト物がお持ちさう分井「それかおきえんあ
せく、ハイ何れかおん惚る 男ハ日尔のま中うお百姓の
源義と中う中仁ぢう本う「ハイ源義といふ仁ハ二人分り本がト
言つる娘の類うも死べ一不とおまひるなまを又おまは
他人の氣配といふも世ふり事かおまははこれか
妹のからきおんいらさうらとせとらうらふまをともおまは

とらふもほしはくぬの事大そふ巡る道ても旅もあつ
びつろ物成振中うの揮りの涙のぬえん今以の世非あ
世に居るごう物史あつけくも九をさしう心そる所も
引別もかみぬ仁ふ信せられて悔は惜とだうけぞうま
ま秋の雨の重を成でん死ごとかりひあはるめと妹と
信しく異とのした信とて兄も中う美庵う常ふ體を
まをせる野う史とも死ごとは舞き九五而の意成たづ
たう行の指もも解ヨト吐一のうちふ縄もも紙指も信う

て九まが老母の家あぞいさるる信とてかまひまをる事か
足へびる迫り信と見えり見惚てまふ指茶茶成をこと
落へたれば旅人の可笑く脊中成押きコレか八まがらう
まの以養中みり中うごの今少く信をたとい入れたう
お前の親父がいるいハハハ親父と源藏と中井可サキと
延らがるういさうお前が思つことて笑ハハ女中成因たこと
まもふ縁の及連おを信史より何おあも差合のるん
好男あ月色でいさぬる不形知危トおん重が櫻へ抱つけん



ハ 一平モえんを建家が男有まきんト 縁入のま先と 一アノ女もあふひ
ト成まる奴もハモウえせもは殊中疾おまらされはし
宿うそちちち午刻に出船のるやとあひませぬぞトとの
久。そあし行成と茶えせ成を石の人不教と自己が交し
り成せ兒とゆねハ母のまのぞ 母 可能ゆとておま子今自色と
代ッて道ひ不雅うとあつたおえせと誰ぞ不教をおま子ハ
新田の菊さん不才教とてあつはしと 弟さんるハ世ご力
間があつても宿うトお公を母不只成よせ行中うさくやく

これハ金平がハ 一アノ女もあふひ 縁入のま先と 一アノ女もあふひ
り成せ兒とゆねハ母のまのぞ 母 可能ゆとておま子今自色と
代ッて道ひ不雅うとあつたおえせと誰ぞ不教をおま子ハ
新田の菊さん不才教とてあつはしと 弟さんるハ世ご力
間があつても宿うトお公を母不只成よせ行中うさくやく

且形後アレ西院より中の位牌が別九重且形寺へ
 お形ひり戒名成順て並まうこは像音ありお花あり
 手向てあるくも下はしき名がも向く像唐の半粒万粒の
 経よりハアノ塔の為不直回向トリ末重にもさうふとく佛あり
 小向ひ唐の積漬経畢く夕飯とまのひ粒四角八分の
 おぐりお増附ハ愛をさぐさあり

鶯鳥塚千代迺初聲耳三編下

